

上岡敏之、〈第九〉を語る



ドイツで長年活躍してきた指揮者の上岡敏之が、ついに読響で年末の〈第九〉の指揮台に立つ。過去の客演で〈運命〉〈田園〉を振り、固定観念にとらわれないベートーヴェン像を提示した指揮者は、どんな〈第九〉を聴かせてくれるのか。その意気込みを聞いた。

若い頃から 本質変わらず

——〈第九〉という第4楽章の“歓喜の歌”に加え、日本では年末の演奏が恒例になっていて、特別で神聖な音楽というイメージがありますね。

〈第九〉は晩年に書かれた長大な作品です。でも、僕はベートーヴェンの生涯最高の傑作とは思っていません。ベートーヴェンは〈第九〉の後にも交響曲を書こうとしていました。もっと

長生きしていたら、さらにすごい作品を生み出していたかもしれません。

若い頃から晩年の〈第九〉に至るまでの間に、ベートーヴェンの作曲上のテクニックは大きく進化しましたが、音楽の本質はほとんど変わっていません。僕はもともと、作曲家の晩年に、その芸術が全人格的に統合されて完成に至るという風には考えていないんです。〈第九〉も、あくまで1810年代後半から1820年代前半の創作活動の一つの側面を示すものだと思います。

メトロノーム表示は もっと自由に考えていい

——〈第九〉を演奏する際、まず問題になるのはテンポですね。

私はベートーヴェンが♩ = 60と書いていたら4分音符を基本として考えるし、♩ = 60とあれば2分音符が基本と考えます。それを基にして音楽を作っていきますが、数字についてはいろいろな状況、例えば会場の響きやオーケストラの大きさなどを考慮しながらも、それに縛られることはありません。メトロノームの表示は早くても遅くても構わないんですが、2分音符を基準に考えると、音楽の基本単位は1小節で1拍ととらえることができます。従って、一般的でオーソドックスな演奏よりは速くなるでしょうね。——この部分のメトロノーム表示は、ベーレンライター版では♩。(付点2分音符) = 84ですが、テンポはもっと柔軟に考えていいと思いますか。

ええ。ベートーヴェンのメトロノーム表示は、一つの目安ではあるけれど、唯一絶対の指示ととらえる必要はないでしょう。ベートーヴェンは変奏の達人ですから、一つのフレーズや音型が形を変えて繰り返し出てきます。それをみな同じテンポで演奏すべきだと作曲家自身が考えていたとは思えないし、不可能だと思います。音楽の構

造自体が内包するテンポを基準に、全体のバランスを考えながら変えて演奏する方がむしろ自然です。

遅い指示の部分を速く弾くことはできます。でも、速い部分を遅くするのは結構難しい。音楽が弛緩^{しかん}してしまいますから。ベートーヴェンの音楽は、それ自体が凝縮された強いエネルギーを持っているので、なおさらです。また、その日の演奏の雰囲気やオーケストラのコンディション、客席の盛り上がり方などによってもテンポは微妙に変わってきます。

「息継ぎ」ができない ベートーヴェンの音楽

——ヴッパータール交響楽団を指揮した〈第九〉の録音(日本コロムビア)では、第4楽章は出だしから猛烈に速いテンポを取っていますね。

あれは3年ぐらい前に、「本来はこうじゃないか」と自分で思っていたことを実践しました。しかし、その後、自筆譜をよく読んでさらに研究した結果、今ではあの解釈はあまり良くなかったと思っています。今なら、第4楽章の出だしはもっと速いかもしれませんが、全体的にはもう少しテンポを落とすでしょう。

ベートーヴェンの全作品を通じて感じるのは、器楽、声乐を問わず、音楽

に息継ぎする箇所がないということですが、ベートーヴェンのオペラ〈フィデリオ〉を振っている時にも感じたことですが、ベートーヴェンという人は、「人間は息をしておけない」と考えていたふしがある（笑）。バリトンのレチタティーヴォが入ってくるまでは、低弦が奏するモチーフはほぼイン・テンポで、途中で2か所、テンポ変化の指示があるだけです。この指示を忠実に守ったら、伝統的な演奏とは相当異なるテンポになります。

一方、“歓喜の歌”のドイツ語テキストのイントネーションは、ベートーヴェンが付けた音楽上のアクセントとは随所で異なります。〈第九〉のテキストは、シラーの原詩にベートーヴェ



ンが手を入れたものですが、作曲しているうちにシラーの世界からどんどん離れて自分の世界に入ってしまったんだと思う。音楽に「自由」への希求を盛り込みたいという作曲家の強い意志が、自然な流れとは言いがたい、一種異様な緊張感を持った音楽を作り上げています。

ラストは 熱狂的な決意表明だ

——自由と友愛を高らかに歌い上げて終わる大団円のイメージとは異なる解釈ですね。

〈第九〉のラストは予定調和的なハッピーエンドではなく、「さあ、これから自由を闘って勝ち取るぞ!」という熱狂的な決意表明だと思います。そもそもベートーヴェンの音楽が持つ精神性を理解するには、ゲーテやシラーといった同時代の精神、啓蒙主義からロマン主義に至る時代背景をよく知らなければいけない。でも、今の若いドイツの音楽家はゲーテもシラーもあまり読んでいないんです。若手指揮者は何も知らないで音楽を効果的に聴かせるための「演出」ばかり追求している。聴かせどころのツボを押さえて「ブラボー!」を狙うんです。

——ほかの楽章についてはどうですか。

第2楽章で、中間部に入る直前のテ

ンポ変化（モルト・ヴィヴァーチェからプレスト）も議論を呼ぶところですが。ここでは音楽の基本単位を全音符ととるか2分音符ととるかによって、テンポが違ってくる。ベーレンライター版は全音符です。僕はこの中間部は、ピアノ・ソナタ第29番〈ハンマークラヴィーア〉の第2楽章を参考に、全音符が基本単位だと解釈します。

また、第3楽章は一般的に緩徐楽章として扱われていますが、メトロノーム表記は♩（4分音符）=60です。これは普通、アンダンテのテンポでしょう。つまり、〈第九〉には、本当の意味で緩徐楽章に当たる楽章はないんです。第4楽章でベートーヴェンが目指した強い意志の前に、それまでの三つの楽章の音楽は、すべてが凝縮され、加速されている。そして、ついに第4楽章の最後には、収拾がつかないほどの狂騒状態となり、音楽は大混乱のまま終わる……。

一番嫌いなのは 「定番」の演奏

——日本のオーケストラは〈第九〉慣れているといわれますね。

確かに日本のオーケストラは〈第九〉だけでなく、ベートーヴェンをよく演



©読響

奏しています。でも、大事なことは、どんなやり方で演奏しているかです。ごく限られたリハーサルですぐに本番というのは、僕に言わせれば、演奏したうちに入らない。〈運命〉にせよ〈田園〉にせよ、ちゃんとやろうとしたら大変ですよ。簡単なりハーサルで仕上がるような代物じゃない。

〈第九〉は年中行事になっていますから、オーケストラからすれば、ここでリタルダンドすれば練習が少なくてすむ、みたいなテクニックが出てくる。だから、どのオーケストラでも同じ箇所でルバートがかかるし、そうしないと指揮者が怒られる（笑）。でも、それは惰性です。僕が一番嫌いなのは、「定番」と言われるような演奏です。今回は7回の公演がありますが、お客さんが聴くのは1回だけです。その1回が心に残るものであってほしいし、そういう気持ちをメンバーと共有できればいいと願っています。

◎コンサートマスター

日下紗矢子

Sayako Kusaka

日本とドイツ 文化の違いを感じます

「日下さんはドイツのベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団の第1コンサートマスターも務めています。ベートーヴェンの〈第九〉はドイツでは？」

たまに演奏会のプログラムに入るぐらいで機会はあまりありません。ベルリン放送交響楽団だけは毎年年末に〈第九〉を演奏していますが、例外だと思います。ドイツの12月は何といってもバッハのクリスマス・オラトリ

オ。すごい数の演奏会が行われるので、同僚達は何十回弾いたか分からないほどです。私が4年ほど前にコンツェルトハウス管でこの曲を弾いた時、初めてだと言うと逆に驚かれました。

実は私、〈第九〉はまだ一度しか弾いたことがないのです。芸大時代にアマチュアオーケストラでエキストラとして弾いたことがあるだけ。2009年にコンツェルトハウス管に入団して以来、ベートーヴェンの交響曲は〈第九〉以外すべて何度も演奏しましたが、〈第九〉には縁がありませんでした。

「ベートーヴェンの交響曲はどれも人気があります。演奏する立場では？」

ベートーヴェンは単に好きというより興味深いですね。どう弾くかというアプローチをいつも考えさせられます。古楽的にノンヴィブラートで演奏すべきだという指揮者もいるし、



©Kiyoaki Sasahara

逆にもっとロマンティックな音楽を作ろうという人も。その両極端ではなく、中間的な場合もある。指揮者によって弾き方がまったく違うのです。私は今回、初めて上岡敏之さんと演奏します。今から楽しみです。

「日下さんは2月末、日独でコンマスを務めることによる友好促進が評価され、駐独大使から表彰されました。日独の違いをどう思いますか？」

コンツェルトハウス管は、バッハやモーツァルトなどの宗教曲もよく演奏します。こうした合唱曲は、日本では大きな楽団が演奏することはあまりありませんが、ドイツはキリスト教の国ですし、文化の違いだと思います。また、合唱曲は言語と密接なので、言葉をどう発音するかで音楽の発音の仕方も変わります。ドイツ語を分かっているければ、正しいアーティキュレーションで演奏するのは難しい。そして、私の経験上ですが、欧州の楽団はハーモニーに敏感なように思います。移調した時とか和声が特別な時、指揮者が何も指示しなくても、皆が自然に音を寄せる。和声感で音楽を作るというのが強みではないでしょうか。日本で演奏していて、和声感にはもっと敏感であっていいと思うこともあります。

「リハーサルも違うのでしょうか？」

ドイツでは、どんな細かいこともあまいにしない。指揮者に質問して明

確にすることが多いです。日本では、指揮者が明確に指示を出さなかったり、よく分からない指示であっても、皆何となくそのように演奏できちゃうのですね。どっちがいい、悪いではなく、国民性の違いかなと思います。ただ、「こんな感じ」で済ませてはいけない時には、指揮者と積極的に意見交換して、はっきりさせると音楽も変わってくるのでは。

でも、たまに思うのです。はっきりさせすぎてもつまらない、と！ 大人数で弾くから明確にすることは大事ですが、音楽は毎回微妙に変化していく。同じ曲を何回も演奏する時には特に、その時の流れで自由に音楽を作れる“余白”みたいなものがあることで面白味が増すと思います。その余白を上手に使うために、皆がアンテナを絶えず張っていなければ意味がなくなってしまうのですが！

「コンマスの役割って何でしょう？」

指揮者とオーケストラをつなぐ仕事です。指揮者がどんな風に音楽を作りたいかを理解して、その方向にもっていく。共感できることも、できないこともある。指揮者の癖もある。指揮者がどういう音楽を目指すのか、わからない時が一番大変です。いろんな条件のもと、指揮者の考えを瞬時に判断してオーケストラをまとめる。コンマスってつくづく難しいと思います。

名匠ボーダーの〈新世界〉で、新年が華やかに幕開け!

1/7 (木) 19:00 第588回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

1/9 (土) 14:00 第183回 東京芸術劇場マチネシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ワーグナー：楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉第1幕への前奏曲
ヒナステラ：ハープ協奏曲 ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉
指揮：ミハエル・ボーダー ハープ：グザヴィエ・ドウ・メストレ



©Alexander Vasiljev
ミハエル・ボーダー

オペラを得意とする名匠が振る後期ロマン派の傑作〈人魚姫〉

1/14 (木) 19:00 第554回 定期演奏会
サントリーホール

R. シュトラウス：交響詩〈ドン・ファン〉
リスト：ピアノ協奏曲 第2番 ツェムリンスキー：交響詩〈人魚姫〉
指揮：ミハエル・ボーダー ピアノ：フランチェスコ・ピエモンテージ



©Alexander Vasiljev
ミハエル・ボーダー

92歳を迎えた巨匠による特別演奏会《究極のブルックナー》

1/21 (木) 19:00 特別演奏会《究極のブルックナー》
東京芸術劇場コンサートホール

1/23 (土) 14:00 特別演奏会《究極のブルックナー》
東京オペラシティ コンサートホール **完売**

ブルックナー：交響曲 第8番
指揮：スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ



©読響
スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ

日本屈指の実力派・小山実稚恵らの究極のアンサンブル

1/27 (水) 19:30 第9回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説 **完売**

シューベルト：ピアノ五重奏曲〈ます〉ほか
ピアノ：小山実稚恵 ヴァイオリン：小森谷巧、長原幸太
ヴィオラ：鈴木康浩 チェロ：毛利伯郎 コントラバス：石川 滋



©Kazuo Matsumoto
小山実稚恵

首席客演指揮者・下野竜也が名曲〈悲愴〉で渾身のタクト!

1/29 (金) 20:00 第12回 読響カレッジ
文京シビックホール ※19:30から解説

チャイコフスキー：交響曲 第6番〈悲愴〉
指揮：下野竜也 ナビゲーター：中井美穂



©読響
下野竜也

1 月 公演の聴きどころ

1月は、ドイツが誇る名匠ミハエル・ボーダーが読響に初登場。7日と9日のニューイヤーコンサートでワーグナーの〈マイスタージンガー〉前奏曲やドヴォルザーク〈新世界から〉を次々と指揮して、新年の幕開けを華々しく飾る。「南米のバルトーク」とも称賛されるヒナステラのハープ協奏曲では、ウィーン・フィルのソロ・ハーピストとしても活躍したグザヴィエ・ドウ・メストレが共演。“世界最高峰のヴィルトゥオーゾ”と称される名手がこの上なく美しいソロを繰り広げるだろう。

14日の《定期演奏会》では、近現代プログラムを得意とするボーダーが、ツェムリンスキーの大作、交響詩〈人魚姫〉を披露。熟練のタクトで大管弦楽を自在にドライブし、人魚姫の美しくも劇的な物語を鮮やかに描き出す。映画音楽のように流麗な旋律も聴きものだ。前半には、欧州で高い評価を得るスイス生まれの新鋭フランチェスコ・ピエモンテージが、リストのピアノ協奏曲第2番で共演。ファンタジー豊かな曲想に合わせて、独自の美意識と感性で作品の本質に迫る。

21日と23日は、桂冠名誉指揮者スタニスラフ・スクロヴァチェフスキが待望の来日を果たし、特別演奏会を開催。92歳を超えてなお世界の第一線で活躍する巨匠が、得意とするブルックナーの交響曲第8番で渾身のタクトを振る。近年の演奏は、いくつかの楽団に限定されており、その一つ一つが大きな注目を浴びている。巨匠が魅せる至芸を、ぜひともお聴き逃しなく。

27日は、501席の親密な空間で室内楽を堪能できることで人気の《読響アンサンブル・シリーズ》公演。日本屈指のピアニスト小山実稚恵が、シューベルトの〈ます〉で極上のアンサンブルを紡ぐ。歌心にあふれるドイツ・ロマン派音楽を堪能したい。

29日は、遅めの20時開演が好評の《読響カレッジ》。首席客演指揮者の下野竜也がチャイコフスキー晩年の最高傑作、交響曲第6番〈悲愴〉を指揮する。19時半からの解説もお楽しみに。

(文責：事務局)

常任指揮者カンブルランと辻井伸行が“夢の競演”

2/4 (木) 19:00 第589回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール **完売**

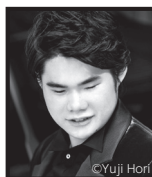
2/5 (金) 19:00 第21回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール **完売**

2/6 (土) 14:00 第85回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール **完売**

デュティユー：音色、空間、運動
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第1番
ベートーヴェン：交響曲 第6番〈田園〉
指揮：シルヴァン・カンブルラン
ピアノ：辻井伸行



シルヴァン・カンブルラン



辻井 伸行

色彩の魔術師カンブルランが描く二つの《夜の音楽》

2/12 (金) 19:00 第555回 定期演奏会
サントリーホール

2/14 (日) 14:00 第184回東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク
マーラー：交響曲 第7番〈夜の歌〉
指揮：シルヴァン・カンブルラン



シルヴァン・カンブルラン

新鋭ツィガーンが振る〈アランフェス協奏曲〉&〈ボレロ〉

3/4 (金) 19:00 第22回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/6 (日) 14:00 第185回東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ビゼー：〈カルメン〉組曲から
ファリャ：〈三角帽子〉第2組曲
ロドリゴ：アランフェス協奏曲
ラヴェル：ボレロ
指揮：ユージン・ツィガーン
ギター：朴 葵姫 (パク・キュヒ)



ユージン・ツィガーン



朴 葵姫

ドイツの巨匠ツァグロゼクがブラームスで渾身のタクト

3/10 (木) 19:00 第590回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

3/12 (土) 14:00 第86回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ブラームス：悲劇的序曲
R. シュトラウス：メタモルフォーゼン
ブラームス：交響曲 第1番
指揮：ローター・ツァグロゼク



ローター・ツァグロゼク

円熟を深めたツァグロゼクが振る迫真の〈英雄〉

3/17 (木) 19:00 第556回 定期演奏会
サントリーホール

ベンジャミン：ダンス・フィギュアズ (日本初演)
コダーイ：組曲〈ハリー・ヤーノシュ〉
ベートーヴェン：交響曲 第3番〈英雄〉
指揮：ローター・ツァグロゼク



ローター・ツァグロゼク

入魂!“炎のコバケン”のチャイコフスキー〈1812年〉

3/24 (木) 19:00 第6回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール

モーツァルト：歌劇〈フィガロの結婚〉序曲、ピアノ協奏曲 第20番
チャイコフスキー：弦楽セレナード、大序曲〈1812年〉
指揮：小林研一郎
ピアノ：田部京子



小林研一郎

小林研一郎が導く魅惑の音絵巻〈シェエラザード〉

3/25 (金) 20:00 第13回 読響カレッジ
文京シビックホール ※19:30から解説

リムスキー=コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉
指揮：小林研一郎
ナビゲーター：中井美穂



小林研一郎

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

ニューイヤー・スペシャル・コンサート 小林研一郎&読売日本交響楽団

■1/17 (日) 14:00 なかのZERO 大ホール

指揮：小林研一郎 ヴァイオリン：藤原浜雄 ヴィオラ：田原綾子

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲

ベートーヴェン／交響曲第3番〈英雄〉

【料金】SS ¥4,300 S ¥3,800 A ¥3,300

【お問い合わせ】なかのZERO チケットセンター 03-3382-9990

オービック・スペシャル・コンサート2016

読売日本交響楽団 名曲シリーズ福岡公演

■1/25 (月) 19:00 福岡シンフォニーホール

指揮：小林研一郎 ヴァイオリン：木嶋真優

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

ブルッフ／ヴァイオリン協奏曲第1番

ベートーヴェン／交響曲第3番〈英雄〉

【料金】S ¥6,100 A ¥5,100 B ¥4,100 C ¥3,000

【お問い合わせ】読響チケットセンター 0570-00-4390

ヨランダオフィス・チケットセンター 0570-033-337

セクスイハイム Presents

辻井伸行×三浦文彰 究極の協奏曲

完売

■2/16 (火) 19:00 市川市文化会館 大ホール

2/17 (水) 18:45 愛知県芸術劇場 コンサートホール

2/18 (木)、2/19 (金) 19:00 フェスティバルホール(大阪)

2/21 (日) 14:00 岡山シンフォニーホール

2/22 (月) 19:00 福岡シンフォニーホール

2/24 (水)、2/25 (木) 19:00 Bunkamura オーチャードホール

2/27 (土) 14:00 よこすか芸術劇場

2/28 (日) 15:00 栃木県総合文化センター メインホール

指揮：クリストファー・ウォーレン＝グリーン

ピアノ：辻井伸行 ヴァイオリン：三浦文彰

ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第2番

チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲 ほか

※会場ごとにプログラム、料金、お問い合わせ先が異なります。詳細はオフィシャルサイト
(<http://avex.jp/classics/kyukyoku2015/>)

をご覧ください。